

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



大同県聚楽郷采涼山プロジェクトで2000年に植えたマツは10m前後まで成長した 2022年10月撮影

Contents

- 2023 新年のご挨拶 P 2
- 大同緑化協力25年の軌跡 P 3
- GENなんでも勉強会・GEN自然と親しむ会参加者募集 P 4
- あの人この人 P 6
- 黄土高原紀行 P 7



GEN公式サイトリンク

2023.1

209

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク



2023 年頭のご挨拶



2023年を迎えました。コロナ感染症による混乱が続いています。ロシアがウクライナを侵略し戦争がはじまりました。年頭にあたり世界が平穏を取り戻すことを祈ります。

緑の地球ネットワーク（GEN）の活動もコロナ感染症の影響をつよく受けました。昨年も中国現地との往来ができませんでした。このため活動開始30周年の記念事業が延期となりました。また大幅な円安は中国国内での緑化費用に影響しました。

このような状況にかかわらず中国での植樹は完了できました。インターネット等で中国側と連絡をとりあって河北

GEN代表 前中 久行

省蔚県陽眷鎮でアブラマツとアンズあわせて30ヘクタールを植えました。植樹を完了できたのは会員のみなさま、ご協力企業、団体、広く関心をもっていただいた方々のご支援のおかげです。大変感謝しております。現地のみなさま、ありがとうございました。

国内活動として自然と親しむ会や国内ツアーのいくつかはコロナ感染症の間隙をぬって対面で実施できました。その他は中止、あるいはリモート併用になりました。

総会や世話人会、運営懇談会では、従来の方式に併せてリモートを活用しました。なんでも勉強会はリモートで一般向けに公開しています。さらにYouTubeやnoteで再掲しています。メルマガ「緑の地球マガジン」を再開してGENの活動を広く発信しています。中国の関係者から大同市の植樹地の写

真がとどきFacebookなどで紹介しました。樹木は順調に育って立派な林になっています。ご安心ください。会報『緑の地球』はISSN 2758-3228を取得し、旧号も含めて国会図書館へ納めました。GENの活動を伝える資料として今後の発行号をふくめて保存されます。

今年の植樹については、引き続き陽眷鎮の二つの村の植樹が計画中です。二つの村にわたりますが場所は連続しています。油松と条件の厳しい場所にも強いサージ（沙棘）を植えます。現時点ではコロナ感染症の動向は不明です。とくに中国では昨年末以後陽性率が急拡大しているようです。現地ツアーは難しいでしょう。でも安全が確信できて現地の同意がえられるなら事務局で訪問して現地を確認したいです。30周年記念事業は可能なものから進めます。

今年も引き続き、支部活動、運営懇談会、総会、自然と親しむ会など様々な形でのご参加とご支援、ご協力、ご提案をよろしく願います。

新年快樂！ 身体健康！ 恭喜發財！

緑化事業のますますの発展を祈って

蔚県志願者協会副会長兼秘書長 柳 志永



2017年に緑の地球ネットワークが河北省蔚県で植樹を開始して以来、私はボランティアで参加し、これまで協力と交流をつづけ、緑化という共通の目標に向けて協力してきました。

この数年間を振り返ると、会員のみなさんが海を越え、緑化という崇高な理想を抱いて中国に来て何千何万本の友好の樹木を植えてきました。百年後、この場所は森になるでしょう。中日両国が一衣帯水、友好の初心を忘れずに末永く活動が続くこと、地球環境が改善し、青々とした山河が広がることを心より願います。

これからもみなさんを迎え、各自が努力して植樹を続け、地球緑化を進めていけることを期待しています。また、協力と交流を深め、同じ夢のため

に肩を並べて前進していけることを期待しています。2023年の新年を迎えるにあたり、新年のご挨拶を申し上げるとともに、日中友好が末永く続き、環境保護の事業がより盛り上がることを願います。

年末寄付のご報告

11月の会報で年末寄付を呼びかけたところ、たくさんのご寄付をいただきましたのでご報告いたします。11月5日～12月31日までの期間に、449,837円、44件のご寄付をいただきました。ご協力いただいたみなさまに心より感謝いたします。4月1日からの累積額は1,545,456円となりました。

GENは大変厳しい財政状況がつづいており、引き続きのご協力をいただくと大変助かります。ご寄付はGENのHPの「応援する」ページからお申込みいただけます。（<https://gen-tree.org/support/>）

運営懇談会を開催しました

12月10日（土）、2022年度のGEN運営懇談会をおこないました。大阪の会場とオンラインを併用しておこない、16名が参加しました。

今回の運営懇談会では、スライドを使った現在の蔚県での緑化協力活動の報告のあと、国内での1泊2日の合宿について、オンラインでの取組み、GENの将来像について、今後の活動のあり方などについて参加者が意見を交わし、さまざまなアイデアが寄せられました。



大同緑化協力25年の軌跡

通信環境の急激な変化

GENの山西省大同市での25年の緑化協力を振り返り、当時の写真も交えてシリーズでご紹介します。今回で34回目です。（高見邦雄）

昨年末に中国のカウンターパートと日本側とで打ち合わせを行いました。Zoomによるオンラインで。それでこのテーマを思いつきました。

大同での緑化協力事業を1992年にスタートさせ、その年の秋から3年連続で私は一人で大同を訪れました。日本との通信がたいへんだったのです。伊丹空港（当時）から飛び立つと、私を捕捉する手段は日本側になくなります。私が日本に電話をかけるには、県城のホテルに泊まり、フロントで国際電話を申し込みます。1時間ほど待つとスタッフが呼びにきますので、フロントに走ります。途中で相手の声が遠くなって切れることも多く、最初からやり直し。

ファクスを送るには大同市内まで出かけ、郵便局に行く必要がありました。



市場でもQRコードを読み取って支払いできる

A4版2枚の原稿を送るのに200元くらいかかります。県の招待所の若い女性のサービスさんの月給と同じくらい。大同事務所の成立で、最初にしたのがファクス機の日本からの持込みでした。

1990年代後半に携帯電話（手機）が登場しました。最初はステータスシンボルで、幹部とお金持ちがこれ見よがしにかざしていました。2～3年たつと、青年団の幹部も持ち始めましたが、農村部では電波（情報）がなくて使えません。電波を探すのにバッテリーを消耗するので、充電に苦労していました。

私が携帯を使い始めたのは2001年春です。多くの農村に2本セットでアンテナの鉄塔が建ち、農家でも固定電話を飛び越して携帯になり、やがてスマホになりました。私も携帯やスマホがないと仕事にならなくなったのです。

中国の携帯は電波が強くて、どんな山のなかにも呼び出し音になります。出ると日本からで、「原稿の依頼、1200字で、写真2枚を添えて」といった連絡です。それまで中国では現場の仕事だけしていればよかったのに、助成金の申請、報告などの作業が増えました。不便

助成が決まりました

外務省が推進し日中友好会館が実施する日中植林・植樹国際連帯事業の助成を申請したところ、このほど上限の1500万円で決まりました。

事業を実施するのは河北省張家口市蔚県陽眷鎮で、柳澗溝村はアブラマツ（油松）、白草坡村はサージ（沙棘）

をそれぞれ15haずつ計30haを植えます。村は2つにまたがっていますが、造林地は隣接して1か所にまとまっています。

送られてきた写真を見ると、黄土丘陵の厳しい環境の傾斜地で、とくに白草坡村の区域は南向きの日向斜面で、非常に困難な場所です。サージはグミ科の灌木（水条件に恵まれると小喬木）で、放線菌・フランキアと共生し、空気中の窒素を固定するため痩せ

な時代になったものです。スマホの機能、利用法では日本のずっと先を行っているでしょう。WeChat（微信）を使えば、メールのやり取り、音声通話、ビデオ通話をはじめ各種のSNSができます。さらに支払いのお金のやりとりも自由自在（お金があればですけど）。蔚県の青空市場で膝のまえに少量の野菜を並べた人がQRコードをかざしていました。それをスマホで読んで代金を支払います。中国在留の友人はもう何年も現金を持ち歩かないと話しています。

中国にはもう3年も行っていません。心配なことのひとつが私のスマホがちゃんと生きているかどうか。単なる通信手段でなく、身分を証明する重要な手段であり、銀行口座とも密接に連携していますので、これが使えなかったらたちまち立ち往生でしょう。コロナ禍でいろんな仕組みも変わっているでしょうから、それに対応できるでしょうか？

この30年でなにが大きく変わったかといえば、この通信と交通をあげなければならないでしょう。

大同での緑化協力についてYouTubeで動画を配信しています。右のQRコードよりアクセスできますのでぜひご覧ください。



地にも非常に強く、その実が野鳥のエサとなり、自然の力で広がっていきます。蔚県では野鳥保護にも取り組んでいますので、意義の大きな事業になると思います。

助成内容には技術者派遣費用と送金手数料などの事務費も含まれています。



参加者募集

2月のGENなんでも勉強会オンラインと3月のGEN自然と親しむ会のご案内です。みなさまのご参加をお待ちしております。

2月 GENなんでも勉強会オンライン 森との新しい距離感はどうな感じ？ 日本について考える：ヨーロッパ発の大放談



藤沼潤一さん



山元周吾さん

昨年2月のGENなんでも勉強会オンラインで「ヨーロッパ人の暮らしと森」と題して、ドイツとエストニアで暮らす、コンサルタントの山元さんから、日常の暮らしのあり方やそれぞれの国での市民と森との暮らしの距離感を聞きました。その距離は日本よりもずっと近く、身近に森があり、森と積極的に関わりながらさまざまな恵みを楽しんでいることを知りました。

今回はその続編として、日本も近い将来、人の暮らしと森との距離が再び近づき、森林が多くの市民の生活の一部に溶け込むような日がくるのか、などなど日本の森林の将来を、森林コンサルタントと生態学研究が専門のお二人と一緒に考えていきたいと思っています。今回は冒頭

で、お二人が日本に一時帰国した際の体験談を短くお話いただき、それをアイズブレイクとして議論を進めていく予定です。

○日時：2023年2月25日（土）15時～17時ごろ

○手段：ウェブ会議システム Zoom

○パネリスト：藤沼潤一さん（GEN世話人、タルトゥ大学研究員）山元周吾さん（合同会社喜代七副代表、ミュンヘン工科大学博士課程）司会：長坂健司さん（GEN事務局）

○参加費：無料（定員100名）

○申込み：以下のいずれかの方法でお申込みください。②と③はQRコードからお入りください。

①2月23日までに件名を「2月オンライン勉強会参加希望」とし、本文にお名前を記入してGENまで（gen@gen-tree.org）メールを送る



②2月23日（木）までにGENホームページの「参加する」ページより申込み

③2月24日（金）14時までにイベント管理サイトPeatixより申込み

大阪自然史フェスティバル に出展しました

11月19日、20日の2日間、大阪自然史博物館にて大阪自然史フェスティバルが開催され、GENもブース出展してきました。会場での開催は3年ぶりとなり、今回も野鳥、昆虫、魚、きのこ、鉱物など、各団体が工夫を凝らした展示や、講演会・ワークショップなどがおこなわれました。

前回の反省を生かすべく、GENブースで来場者に足を止めてもらえることをしなければと、中国で買ったワシの凧を飾ったり、折り紙で折った手乗りインコを子供に配ったりしました。

関西の自然にかかわる団体が会場に集い、活動を紹介したり、来場者との会話を楽しんだり、交流を深めることができた2日間でした。



○定員：20名（先着順）

○持ち物：歩きやすい服装と靴、弁当、飲み物、敷物、あれば双眼鏡、野鳥図鑑

○申込み：3月16日（木）までに氏名、生年月日、連絡先をGEN事務局までお知らせください。GENホームページの「参加する」ページからもお申込みいただけます。

※小雨決行

※新型コロナウイルスの感染防止対策をしながらおこないますが、状況により変更・中止の可能性があります。

GEN自然と親しむ会

高槻市番田水路でバードウォッチング

バードウォッチングに参加しませんか。今年は水鳥たちを間近に観察できる高槻市の番田水路でおこないます。

今回は中国での野鳥調査にもご参加いただいた高田みちよさんにご案内いただきます。初めての方もぜひお気軽にご参加ください。

○日時：2023年3月21日（火・祝日）10時～14時ごろ

○場所：高槻市・番田水路周辺

○案内：高田みちよさん（高槻市立自然博物館（あくあびあ芥川）主任学芸員）

○集合：10時20分に唐崎橋バス停（9時58分のJR高槻駅南発、10時3分阪急高槻駅発の高槻市営バス柱本団地行に乗ると、10時19分に唐崎橋バス停に到着します）

○解散：西面大橋バス停（阪急茨木市駅行き）

○参加費：700円

報告

緑地評価のツールのひとつ、i-Tree

川島 和義さん（GEN副代表）

11月29日、GENなんでも勉強会オンライン「i-Treeを用いた市民参加型緑地評価システム」をおこない、17名が参加しました。講演のようすはGEN会員の方はホームページの「会員さま限定ページ」でご覧いただけます。

“i-Tree”というコンピュータ・ソフトがあるそうだ。樹木の種類とDBH（胸高直径）が分かれば、地域や気象の状況に応じて、当該樹木による空気中の二酸化炭素削減効果などの得られる便益が数値として示されるそうだ。アメリカのフォレストサービス（アメリカ森林局）が開発し、無償で提供しているとのこと。11月29日に千葉大学大学院の園芸学研究院准教授の加藤顕さんの話を聞いた。

このシステムを利用して、多くの市民に参加してもらって、樹木等の評価に親しんでもらい、樹木や植物、環境への認識を深めてもらおうということだと理解した。アメリカでは、樹木の

価値を書いて貼り付けるなどの取り組みが行われている例が示された。日本の行政も利用しているところがいくつか紹介された。

金銭で価値を評価することには限界があり、算入されない事項もあるので、そのことを踏まえて理解することが必要だ。話題にはならなかったが、為替レートによる価格換算の正当性をきちんと説明できる人はいない、との経済学者の話も以前に聞いたことがある。

また、二酸化炭素の削減効果も、木を切り出して木材として利用し、その分が森林で補充される状態だとプラスになるだろうが、極相林になればゼロだと言われている。本当にゼロかどうか



か（土壌に蓄積する分があるのではないかと）私は疑いを持っているが、具体的なデータを見たことがない。森林の二酸化炭素削減効果が単位面積当たりどれだけになるのかは、本当のところはよく分かっていないのではないかと私は思っている。

精度にこだわらず、一つの評価として現状の理解を深める道具にはなるだろうから、興味のある人はいろいろと試してみれば、楽しめるだろうと思った。

ご興味のある方はi-Treeのサイトをご覧ください（英語のみ）。

<https://www.itreetools.org/>

スマートフォンのアプリもあります。Google Play、App store から「i-Tree」と検索するとできます。

報告

美山町 里山暮らしを垣間見て

竹取乃紀美子さん（GEN会員）

12月15日、GENなんでも勉強会オンライン「第1部 美山の里山暮らしから見える風景—京都美山かやぶき屋根の下— 第2部 GEN自然と親しむ会—芦生の森合宿報告」をおこない、22名が参加しました。講演部分はYouTubeで公開しているほか、GEN会員の方はホームページの「会員さま限定ページ」で質疑応答部分までご覧いただけます。GEN公式YouTubeは3ページのQRコードよりアクセスいただけます。

芦生の森への道すがら美山町を通るたびに、ここに住む人の暮らしが気になっていました。茅葺の屋根を残すのも近代的な箱物を建てないのも、今の世では大変なこと。自然との折り合いをどのようにつけるのか、現代人として暮らすことの難しさを想像していました。

芦生の森は、京都大学が百年の計で動植物や地形/地質、気候の研究に供するために租借している土地です。研究の為の演習林ということで大きな開発からのがれ、京都、大阪、神戸から指呼の距離にありながら今もほぼ自然の状態が保たれています。稀有の存在です。

芦生の森と隣り合った美山町・茅葺の里も、自然のたたずまいをたつぷりと残っていて、高御堂さんの写真やお話からその素晴らしさが分かりました。春夏秋冬のそれぞれ綺麗な景色の中で、特に印象に残ったのは冬景色。研ぎ澄まされた清らかさを感じました。セリバオウレン、タムシバ等が春一番に咲き、生きることを賛美しているようです。「植物の喜びは日本文化の本質である」との岡潔の言葉が納得できます。そこに暮らすことで自然との一体感や素晴らしさを実感できるのでしょうか、自然は決して優しく美しいだけではありません。不便や不自由もあるでしょうし時には危険を感じた

りもするでしょう。自然と真摯に向き合い、生き生きと人らしく暮らすのは、強い意志と大らかさが必要なのだと思います。だからこそ、繋がりや交流でお互いが助け合える喜びがあり、人と人との連帯感が重要なのだと思います。

縄文時代は約一万二千年続いた持続可能な世界の一つのモデルです。芦生の森では縄文人が猪や鹿、鳥などを狩り、木の実を拾い、由良川ではすなごり、美山町では竪穴住居の屋根をマコモで拭き、ムベの蔓で背負子を作って暮らしていたのではと、幻想しています。そう美山町は今も、縄文人に会えるような素朴さと自然が息づいている人里です。





あの人 この人

「あの人この人」では、個性豊かなGEN会員をご紹介します。

今回は稲垣文拓さんにご登場いただきました。会社勤めの傍ら、狩猟免許を取得し、京都の山で狩猟活動を続けておられます。

このコーナーでご自身を紹介して下さるGEN会員を募集しています。また、「会員のこの方を紹介してほしい」という方がいましたらGENまでご連絡ください。



稲垣文拓さん（京都府）

山の表情は千変万化。晩秋の射光が、谷間を黒く塗りつぶして、尾根から

の木々の紅葉も鮮やかに浮き上がり、威厳に満ち、暖かな夕暮れには、山肌が包み込むようにやわらかく、洛中の向こうの比叡の山影が霞に浮かぶ。雨の日、風の日、空気の湿度や光線で、毎日見る山は変化に富んで見飽きない。この京都西山の麓大原野に越して5年ほど経った。小さな畑と、田んぼを借りて、自給自足とまではいかないにせよ、一部でもよから人任せにしない自ら作り出すことをしようと思って、ここでできることを地道に少しずつ増やしてきた。

狩猟を始めたのは、農作物の被害を減らすかわりに新鮮な肉を得たいと思った。それに、山の恵みを直に感じる手段であると思った。鉄砲を片手に、犬を引き、山に入ると、なにかしら山菜や木の実やキノコやらを見る。命を食べて生きているその実感。今はネットで情報を集めることができるし、頂き物を地元の人と分かち合うこともある。イノシシやシカ肉は山から与えられた恵みである。実際、このお宝をほっておくわけにいかないのである。

私の猟は、檻猟と巻猟。檻猟は中に誘因物で誘い込み、仕掛けに触れると扉が閉まって獲物が閉じ込められる箱罠で捕獲する。これは狩猟免許のうち罠で登録。一人でできるが、毎日の見回りが必要になる。一方の巻猟は、銃器を使う。こちらは第一種狩猟登録

と鉄砲の所持許可が必要になる。複数のメンバーで追い込み捕獲する猟の形式である。具体的には、獲物を撃つ鉄砲隊と、犬を放して獲物を追い立てる勢子の共同作業になる。大事なのは、獲物が今どこにいるかを事前に足跡を探して追う。猟師の勤である。場所が決定すれば、鉄砲隊の待ちと勢子（猟犬）の位置を決める。そして各々持ち場につく。無線で連絡しあい、勢子はタイミングを見て犬を放し、居そうな場所を探して山を歩く。獲物に気づいた犬がけたたましく鳴く。ガサガサ。走った方向を無線で連絡。そのうちパーンと銃声。無線で猟果の報告が入る。勢子の上げの合図で獲物を引き上げて集まる。獲物を山から降ろす。

猟師の仕事は、それだけではない。恵みを皆でさばき、猟隊メンバーに均等に分ける。今日の振り返りがおのずと始まる。お前は山を知らん！と怒鳴られる。師匠のように山に生えている木一本一本まで頭に入っていないのである。待ち方、歩き方、さばき方の所作もこうして猟隊のメンバーに引き継がれていく。やがて、めいめい山の恵みを手にして、帰路につく。しかし、これが気持ちいいのである。

山は、おおらかにして人の暮らしをつつみこむ。頂いた山の恵みは、我が家の鍋の中から、人を温めるのを待っているのである。

最小は2.9cmでした。いろんな条件のちがいで、これほどの差ができるんですね。

最後に樹齢300年の大木が立ち並ぶ場所を見学しました。大阪府と和歌山県の境界付近です。



和泉葛城山の調査に参加しました

高見 邦雄(GEN副代表)

えたもの。

番号札を付け替え、胸高直径と根元直径を測って記録します。直径4cm以上はメジャーで幹周囲を測り、それより小さいものはノギスを使って2方向の直径を測ります。なんだ、簡単じゃないかと思われるでしょうけど、斜面が急で、しかも前日からの雨が残る悪天候で足元が悪く、ほんとにたいへんでした。

測定したのは計134本で、胸高直径の平均は6.7cm、最大は17.0cm、

黄土高原紀行<12>

四、懸空寺と応県木塔（1） 谷口 義介（GEN会員）

懸空寺は、中華五岳の一つ、北岳恒山の主峰をなす天峰嶺（海拔2017メートル）の下の金龍峽にある。垂直に切り立った巨大な岩壁に、かろうじて貼り付いている感じだ。向かって左側はレンガを積んで台基としていますが、右半分は岩壁に差し込んだ太い木の土台によって、楼閣を支えている。下に立っている細い柱はなんとも頼りなげだ。見かけ程度のものだろう。

ワイヤーの吊り橋をゆらせながら急流を渡って、溪谷ぞいを少し歩き、直下から見上げると、寺は文字どおり空に懸かっているような感じだ。高さ25メートルほど。

急な階段をのぼり、山門をぬけると、右手方向に二層あるいは三層の楼閣がつづいている。危楼とよばれる三層構造の建物のさきには、はなはだ危うげな棧道があり、それを渡り切るともう一つの危楼がある。そこの最高所をなす三教殿には釈迦・老子・孔子の塑像が安置され、儒仏道混濁の珍しい事例といわれるが、極度の高所恐怖症の私は、足がすくみ眼がくらみ、棧道を一步も進めない。三聖人には失礼して、手前で引き返した。

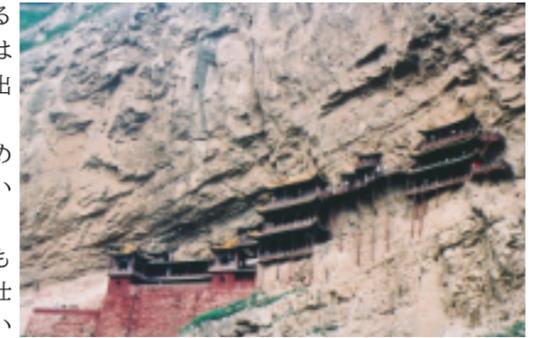
懸空寺は北魏末の創建と伝えられるが、金・明・清代と重修されつづけた。おそらく、当初は相対する鼓楼と鐘楼にはさまれた仏堂（本殿）・地藏堂・千手観音殿がレンガの台基の上に営まれ、のち柱を支えとして架構された雷音殿・三官殿・純陽宮の危楼、さらに棧道をへだてて三教殿・観音殿・五仏殿よりなる危楼が建て増しされたのだろう。

つまり、最初は深山幽谷に俗塵をさけた修行の寺としてスタートしたのだが、のち道教の諸神をまつたり、儒教の聖人・賢者を合祀したわけだ。鑄銅・鑄鉄製および塑像・石製の神さま・仏さまが約80体。救いの如来、悟りの菩薩から、不老長寿の列仙、受験の神さま、金儲けの関羽像、子授けの娘

娘廟まで、善男善女の願いをかなえてくれる何でもがそろっている。

このうち子授けの神について述べると、誕生を祈られるのは男の子だけ。それというのも、一人っ子政策（当時）が徹底される中国では、農村部では二人までが許されているが、先祖の霊をまつるのは男子だけという伝統的観念が根強く、またつねに水不足の黄土高原では、遠くの井戸に水汲みに行くのには男手が必要だからだ（前号の写真参照）。そのため、男の子がさずかるまで、何人も生み続けることになる。三人目以上には罰則があるので出生届は提出されず、必然的に“闇っ子”がふえる。以前、植林のため入った村で、そんな話を聞いた。

ふたたび吊り橋を渡ってもとの広場にもどると、屋台仕立ての土産物店が並んでい



万年中国語学習者のつぶやき

2023年の春節は1月22日とのこと、新しい年もマイペースで中国語学習を楽しみたいと思います。

観光地に出かけると無料のガイドブックの中国語版をもらって来て眺めるのが好きです。観光案内所でまとめてもらって見比べるのも一興。食べ物の紹介では、例えばたこ焼きの中国語訳は「章魚焼」だとタコがそのまま姿焼きにされているようなものを想像してしまうけど、「章魚小丸子」だと見た目と一致して分かりやすいな、などと比較しながら楽しんでいます。

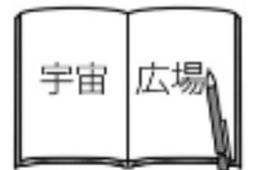
わたしが一番注目しているのは、外来語やカタカナ表記をどう中国語で表現しているかです。例えば大阪メトロ中央線の「コスモスクエア」駅は中国語でどのように表記されているかご存じですか？ また、「東

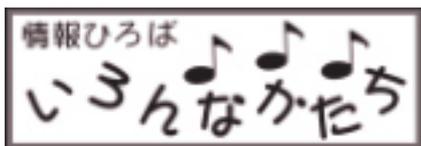
る。中国の観光地でよく見掛けるものばかりだが、珍しいのは古生代の化石。このあたりの地盤は海底が隆起してできたものだというから、近くで拾ってきたのだろう。

清潔そうなトイレがあったので入ろうとすると、オバチャンが立っていて、2角（約3円）払えという。すぐそばのレストランで昼食の予定だと言ったら、タダで使わせてくれた。謝々。

京スカイツリー」駅はいかがでしょう？

正解は順番に「宇宙広場」。「東京晴空塔」のこと。大阪には宇宙広場があったのか、と思わず何度も見返しました。それでは秋田にある「阿仁マタギ」駅や、山手線に新しくできた「高輪ゲートウェイ」駅はどう訳されているのか？ そもそも誰がどういう方法で決めているの？ 意思決定の場でということが議論されるのか？ とても気になります。カタカナを使って外来語をそのまま受け入れがちな日本語と、カクテルもホットドッグも絶対に漢字で表記する中国語との狭間で格闘する翻訳者たちの腕の見せどころでしょうか。（河本）





第28期
自然大学
参加者募集

室内講義7回、野外実習7回の生態系の理解を目的とした市民大学です。

○期間：2023年4月9日～2024年3月3日
(全14回。原則日曜日開催)

○定員：30名 (18歳以上、先着順)

○講師：渡辺弘之氏 (自然大学学長・京都大学名誉教授)、伊藤孝美氏 (NPO法人「自然と緑」理事長) ほか

○申込方法：郵送またはファクスでお名前、生年月日、職業、住所、趣味・特技、電話番号、ファクス番号、メールアドレスを明記のうえお申込みください。

○主催・申込み先：NPO法人自然と緑 (〒540-0006大阪府中央区法円坂1-1-35アネックスパル法円坂4F tel.06-6809-1700 fax.06-6809-2702 e-mail:sizen_mi@osb.att.ne.jp URL:http://home.att.ne.jp/iota/sizen_midori/)

森林ボランティアリーダー養成講座
森林大学
第37期参加者募集

森林大学は森林を知りたい、森林で遊びたい、森林を守りたい人のための市民の学びの場です。

* 当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。
* 当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

○日程：2023年4月12日 (水)～10月18日 (水) (全18回)

○内容：講座はすべて19時～20時大阪産業創造館にて／野外実習は能勢町、箕面国有林、呼子高原ほか

○講師：滝口敏行氏 (森林インストラクター)、山本博氏 (林業技士)、山崎春人氏 (森林インストラクター) ほか

○受講料：36,000円 (野外実習の交通費・宿泊費が別途必要)

○定員：20名 (18歳以上)

○申込み・問合せ：4月7日までに下記まで NPO法人日本森林ボランティア協会 (〒530-0013 大阪市北区茶屋町2-30 tel./Fax. 06-6376-8255 e-mail:mori@npomori.jp URL http://www.npomori.jp)

社会館 (大阪メトロ「扇町」駅すぐ／JR環状線「天満」駅から徒歩3分)

○ライブ配信会場：山西福祉記念会館 (オンライン参加の方はワン・ワールド・フェスティバルホームページ内にある特設サイトよりお入りください)

○参加費：無料※雨天決行

○主催・問合せ：ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会 (〒546-0002 大阪市東住吉区杭全1-15-18大西ビル3階 特定非営利活動法人関西国際交流団体協議会 (KNA) 杭全事務所 tel.06-6777-1039 fax.06-6777-2050 e-mail:onefes.contact-post@onefes.net URL https://onefes.net)

第30回

ワン・ワールド・フェスティバル

国際協力のお祭りワン・ワールド・フェスティバル。昨年はオンラインのみの開催でしたが、今年は会場と特設サイトのハイブリッド開催です。

○日時：2023年2月4日 (土)～5日 (日) 10時～17時 (ライブ配信：11時～17時)、2023年2月4日～28日 (火) までオンライン配信をおこないます

○開催場所：北区民センター・扇町公園・カンテレ扇町スクエア・山西福

編集後記

2023年もどうぞよろしくお願ひいたします。毎年1月号の「いそんなかたち」に六甲奨学金基金のための古本市の案内を掲載していましたが、2022年の案内を掲載していましたが、2022年より通年開催となりました。興味のある方はお好きな時に足を運んでいただければと思います。

阪神大震災をきっかけに、長期にわたり古本市の収入で留学生支援を続けている活動に頭が下がります。ご自宅に眠っている古本がある方はぜひ神戸学生青年センター (https://ksyc.jp/) までお送りください (河本)

会費・購読料・寄付・物品・ボランティアなど協力者のお名前('22.11.2～'22.12.31、50音順、敬称略)